

在特会の論理（7）

——「自分のなかで問題提起された」G氏の場合——

樋口 直人

1. 問題の所在

それまで排外主義はおろか社会運動的なものにも関わらなかった人たちは、どのようなプロセスを経て在特会へと参集していくのか。これは、社会学的にいうならば「マイクロ動員の構造」の解明になり、在特会関連の情報へのアクセス、活動に対する共感、参加動機の形成、現実の参加に至る過程を分析することになる（樋口 1999）。社会心理学的に言えば、活動に至る意識の変遷を政治的社会化の過程として分析することになるだろう。後者に関して真っ先に思い浮かぶのは、ケネストンによる若者の異議申し立ての研究である。彼は、若者達の生い立ちや世界観、人生に対する態度などといった点を中心に、そうした背景要因と活動に至る意識上の変遷を分析した（Kenneston 1968, 1971）。

西欧の極右研究では、背景要因として極右的なミリュエーで育った者が多いことが挙げられている（Klandermans and Mayer 2006）。筆者の調査でも、そうした背景の家庭出身である在特会メンバーは存在した。非正規雇用かニートの鬱屈した心情が、在特会の主張と共鳴して行動に至るというステレオタイプでは説明できないことも、聞き取りからは示唆されている。政治的社会化の過程については、一定のパターンがある。それについては聞き取りデータが出揃った段階で分析するとして、以下では2011年6月21日にG氏（30代男性）に対して行った聞き取り記録を紹介していく。

2. 政治と外国人との接点

《政治に対する関心》

（政治に対する関心は）特にないと、支持党はないですね。20代後半くらいから（選挙に行くようになった）。前半はあんまり行ってなかったんです。（政治一般に対する関心は）まあ、普通に国会中継とかあればたまに見てますし。前まで全然、本当に関心がなくて、「選挙の手紙が来てるわ」という感じだったんですけど、いろいろ考えて与えられた権利を行使しようとして行ってます。（決まった投票先は）特にないで

すね。（入れたい候補が）いないときは白票で出したり。今、ちょっと変わりましたけど。

（2年前の選挙のときは）自分は・・・どこだっけな、自民です。一番無難だからですね。（郵政選挙の時には）ちょっと忘れちゃった。というくらいあんまり記憶がない。民主には多分入れてないと思う。

《外国人との接点》

自分、出身〇〇の方なんですけど、いなかったですね。身近に地域にもいなかったし、××に来たときも、そんなに仕事上とかプライベートで会う人、知る限りではないですね。韓国料理屋に行くとオヤジが韓国人とか、そういうレベルです。（外国人と会うことは在特会に）参加してからはありますけど、それまではあんまり会わなかったんですけど。まあテレビとかネットとかで反対というか否定する人がいるんで、それで違うんじゃないかというのも1つ（参加する理由）。

3. 在特会との接点

《動画の発見》

（きっかけは）うちの会長の動画を見て、ちょうどカルデロン問題で何か街宣をしている時に「こんなことしてる人いるんだ」ってんで注目を持った。今までニュースで名前くらい聞いて、そういう問題が発生しているというのがあって、会長がいう考え方があるんだっていうのがあって、（その）考え方で隠されたものを調べることでわかってきたので。

で、いろいろと調べると在日問題でいっぱいそういう問題が発生しているというのをわかって、関心を持ったんです。確か入管でマスコミにも入管にも文句言っている、強烈だったんで。（動画を見つけた経緯は）記憶が定かでない・・・もう2年ちょっと前なんですけど、普通に見ててニコニコ（動画）で何か再生回数が多いなというので見て、ですね。面白い動画とかを見て、ネットサーフィンですよ、それでやってて本当たまたまですね。（在特会の動画は）面白いというよりも強烈なインパクトがあったんで。自分の中で問題提起された感じになって。グーグルで検索して、在日

と永住権とかそういうなんか検索して、こういうことがあるんだって。(在特会に入ったのは) 去年の3月くらいでしょうか。比較的新しい。(会員番号は) 8000番台。

(拉致やワールドカップについては) 事実としてはもちろん知ってます。で、自分、結構まあ頭悪いんで、頭悪いというか考えなかったんで。15、6(歳)から20代前半の時は天皇制とか何にも考えてなかったんで、「いらんじゃないの」という感覚だったんです。で、20代後半からいろいろ引かかる、要所要所で引かかる点、たとえば学校で教わってないことが、朝鮮に絡むことだけ教わってないことがあったな、っていうのが。たとえば伊藤博文を暗殺した人とか。それ学校で習った記憶ないんですよ。で、ネットで調べると「あれ、何か韓国人っぽいやつが暗殺したぞ」とあったんで、調べたら本当にそうだったんです。「おかしいな」というのを感じて、それにつながって会長の動画があって、点が線になったという感じのイメージです。

(安重根について) 自分は習った記憶がない。親にも聞いたんですよ。親に「何かこういつているけど、本当にそうなの」といったら、「俺も知らない」というのがあったんで。まあ自分、高卒で普通の大学とか行ってないんで、教育されてなかったのかなあという疑問もそういうときにあったんですよ。(歴史に関わる動画は) NHK だとかそういう類の(を見ていた)。で、それも点になっている部分です。

(それから動画を見るようになったが) 実際に入会しようと思うのには1年くらいかかるんですけど。(在特会のホームページは) 知ってましたけど、たまに動画見て、「ああこういう活動をしているんだ」という。活動の現場に行ったこともないですし、それまで。ネットでそういう調べただけ。

《加入の経緯》

2回目のデモ、蕨であったのと、大阪で同時に違う問題で確かにやりましたよね。それを実際生(放送)で見て、会長がデモやって、蕨のこともカルデロンでデモやって、それですごいことしてるなというので、入会しようかなというのを思ったんです。(実際に参加したのは2010年)4月の終わりくらい。支部長にメールをして、たまたまサタデーナイトを土曜日にやっている、それで参加したいかという誘いを受けたんで、そこに実際にはしてないんですけど——遅れて参加したんで。それで運営にならないかという誘いがあったんで、実際に活動して。

一番最初にメールを送る時も、書いては消して書いて

は消してというのがあったので、やっぱり大なり小なりハードルはあるので。そうですね、最後に送信しようという気持ちになったのは——ちょっと説明しにくいですね。自分の中では何回かやりとりありますよね。「やめとこうかな、でも手伝いたいというものもあるし」というのも、当時はありましたね。(踏み出したのは) 自分の性格ですかね。行動起こしてから考えようと。きちっと考えて計画的にやるタイプじゃないので、行動起こしてから何か考える性格なんで、そういうのもあるかもしれないですね。慎重ではないですね。

(メールを出すのをためらったのは) 初めて出すのもあったし、自分は抗議とかクレームとかもしないタイプなんで。そういうのはあります。まあ、とりあえず会場まで行って、そこから帰るのもあるかと思ったんですけど。実際、その時自分は遅れて、サタデーナイトやってたので、見ながら終わってから入ろうというのがあって、実際終わって入った感じ。まあドアを開ける瞬間とか……。

(参加したのは) うーん、まあ、ちっちゃいことでもできることはないかな、と。自分はほとんど今の時点で裏方の仕事なんですけど。実際の中継の撮影したりとか、(デモ)申請に行ったりとか。そういう調整の裏方を中心にやってるんで、そういうお手伝いもって。(最初から運営する気は) そこまではなかったんですけど。どんなもんか、と実際に見たかったのはありますね。自分も運営側になったから分かるんですけど、そういう活動(に参加するようになる人)はほとんど1割に満たないんです。自分はそんなケアのプロセスしていないので、まあ義憤までいかないですが「何かしなきゃ」という思いになったのかなと、今思えば思うんですね。

(義憤とは) 何ですかねえ。言葉には表現しにくいんですけど、ちょっと難しいですね。いろいろ動画見て、朝鮮人問題とか。あと年金問題、朝鮮人の年金問題とか。そういうの聞く段階で、本当に特別な権利を得るというので、そこで義憤になるということですかね。だから、何か心の底であるんじゃないんですかね。在日の人自分らと違う存在だという。差別といえば、自分はちょっと違う感覚なんですけど、何かあるのじゃないかなって。難しいですけど。

《実際に参加して》

同じような考えを持っている人といろいろ話して、実際こういう問題もあるよとかいうのを、また教えてもらったり。でまた、次もこういうことするから来なよというのがあったし。で、興味があったのでまた参

加するような形になった。(参加したのは入会して) 1ヶ月くらいたってからです。3月終わりくらいに入会して、4月終わりくらい(に参加)ですね。

まあ民主党も要因じゃないですけど、原因の一つになるかもしれないですね。実際、(2009年)7月に在特(会)で反民主のデモやってたんで、民主党政権になってから何かおかしくなったというのは思っていることがあったんで。それとイコールじゃないですけど、何かその朝鮮人も見え隠れしているようなこともあったので、それで怒りじゃないですけどふつふつとするものはあったと思いますね。

(活動の頻度は)週1から2週に1回くらいですか。参加というか、結構イベントというのは急に起きるんですよ。こういう問題が発生したんで、こういうことをやるというので、ばばばっと動くのが多いんで。デモとか自由参加のデモとかで、そういうのは時間の許す限り行ってますね。自分、比較的工場勤務なので土日仕事するけど、平日も休みのときがあるんで、動き易い。(デモ)申請とかも動き易いし、デモとかも休み(でない日)以外は行きます。

(休日に休みたい気持は)それはあります。やっぱり自分が問題とすることで、たとえば外国人問題だったり反民主党だったり(は参加します)。ちょっとこれは違う、在特会のイベントじゃなくて違う保守系のイベントで、ちょっとこれは自分と違うなどというのは参加しないです。(参加するのは)9割くらいは在特会ですね。あと1割くらいは違うところ。(工場勤務でも)1日休みのときも行きますね。全部が全部(休日を)犠牲じゃないですけど、自分のことしながら参加している。自分の趣味もやっていますし、その趣味が若干やらなくなったというのはありますけど。普通に趣味とかもありますし。それに保守系のことばかりというというのでもないです。

(関心を持ったのは)外国人参政権と、あと在日特権の件。もともと選挙権というのは、日本人に与えられた権利ですし、外国人に与えるものではないというのが思ってたんで。で、そんな法律作ってまでやるべきことなのかな、というのを関心を持った。それ自体は知ってたんですが、賛成でなく反対なんですけど、そこまで反対ではなかったですね。在特会で問題提起、いろいろ聞くので調べる、で反対が強くなった感じ。

(参加して得られたことは)あんまないですね。見返りもとめてないというか。いい悪いというのはない、そういう感情ではやってないの。そういう結論というか、そういう感情でやったことはないです。

一言でいうと、ちょっと愛国心までいかないですけど、そういう感情に似たものがあるかもしれない。国

を良くしたい。もっと今の状況より、運動することによって良くなるとは思わないですけど、しないよりかはした方がましという感覚で。後で後悔するよりやって後悔する方がまだいいかな、と。実際問題、会社とかで、政治とか朝鮮問題とか、自分は結構仕事場で(政治に)文句いう人はいるけど、そういう環境じゃないので自分から進んで話すこともないですし。

今年から月イチで行ってます。靖国(神社)に。前は何かあまり行ってなかったの、気合じゃないですけど行ってます。別に義務化されているわけでもないし。

4. 結語に代えて

G氏の場合も、他の一定割合のメンバーと同様に、「たまたま」在特会の動画をみて関心を持ち、行動にまで至った過程をたどっている。最初に参加するときには、メールを「書いたり消したり」といった逡巡はあるものの、参加へのハードルは高くない。そのなかで、「カルデロン問題」のデモで強烈な問題提起をされたというが、これはG氏だけの経験ではないだろう。G氏がみた動画は、2009年3月9日に在特会がマスコミを前に街宣したものだと思われるが¹、再生回数は14万回を超えておりニコニコ動画の在特会関連の動画では2番目に多い。ネットサーフィンが「オルグの場」になっている以上、動画の分析も必要と思われるが、それについては別の機会に試みておきたい。

文献

樋口直人, 1999, 「社会運動のミクロ分析」『ソシオロジ』135: 71-86.

Kenneston, K., 1968, *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, Harcourt, Brace & World. (=1973, 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ』みすず書房.)

———, 1971, *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition*, Harcourt Brace Jovanovich. (=1977, 高田昭彦他訳『青年の異議申し立て』東京創元社.)

Klandermans, B. and N. Mayer, 2006, “Through the Magnifying Glass: The World of Extreme Right Activists,” B. Klandermans and N. Mayer eds., *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.

(付記) 本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申瑛榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。

¹ <http://www.nicovideo.jp/watch/sm6383538>.